

あんげろす

戦争と嘘とフェイクニュースと

佐藤 正晴

戦争と嘘というのは切っても切れない関係らしい。

先般のロシアのウクライナ侵攻を情報戦として見てみると、ウクライナとロシアは対照的なアプローチを見せている。

ロシアが展開するのは、「恐怖」や「怒り」を喚起する情報戦であり、これに対して、ウクライナは、「共感」を軸にしたソーシャルメディアのコミュニケーションを展開している。

この「共感」のコミュニケーションが国際世論を引き付け、各国によるロシア制裁とウクライナ支援への流れを後押しすることになっている。

ウクライナ侵攻をめぐる情報戦の中心になっているのは、動画・画像を使つてのフェイクニュースである。動画や画像はインパクトが強く、より直接的に感情に訴える。

ファクトチェックに取り組むメディアは、フェイク動画の細かい矛盾点などを洗い出す。

フェイクニュースをただし、確かな事実を明らかにして、広く共有する。ウクライナで何が起きているのかを伝えることに加えて、フェイクニュースを見分けるリテラシーを啓発するべきである。

誰もがメディアと同等の発信力を持つ時代にあっても、メディア自身が果たすべき役割は大きい。それと同時に、いつの時代も何よりも戦争をしないことが人類に課せられた最大の課題であることには疑う余地がない。

さとう・まさはる（所員）

第 89 号

2022 年 12 月



いつでもクリスマス？

宇井 志緒利

救い主イエス・キリストの誕生を祝うクリスマス。

日本では12月24日のイブがハイライト、そして25日を過ぎるとすぐにツリーと飾りが片づけられ、お正月モードに一転します。キリスト教界では、3人の博士が祝福に訪れキリストがこの世に現れたことを祝う「公現祭」の1月5日に飾りをはずし、クリスマスイブから12日後の1月6日にクリスマスの祝いが終わります。

十年ほど前に私がカンボジアに常駐していた時、年に一度しかないクリスマスをどの教会で祝うか、現地の友人に相談しました。どこか一か所をどう選ぶか迷っていた私に、「心配しないで、12月から1月の土日どこかの教会でクリスマス礼拝と祝会やってるから。いつがいい？」と。「ええ〜、2か月間いつでもクリスマスなの？」

カンボジアでは上座仏教が国教とされており、大多数が仏教徒で、少数のイスラム教徒がいます。近年ではキリスト教徒が急増して人口の約3パーセントと推定されていますが、当時は日本と同様に約1パーセントと極少でした。信徒数が少ない地方では、近隣の小さな教会が力を合わせ、結婚式や葬儀、洗礼式などを合同で行っていました。クリスマスもしかり、「今週は○教会」「来週は△教会」と、順番にクリスマス会を開いていたのです。

この国では、かつてポル・ポト政権（1975年〜79年）が急速な共産主義化を目指した結果、人口の5人に1人が死亡する状況になり、また1980年代の内戦下でも、キリスト教は「対立する欧米の宗教」として禁止されて



都市部の家の教会でのクリスマス礼拝

きました。1993年、国連の介入による総選挙後、に制定された憲法で宗教の自由が保障された後も、キリスト教

徒は弾圧や差別をおそれて注意深く行動してきました。そのような中で、特に熱心に仏教を信仰する人びとが多い農村部では、クリスマスは住民や役場の人たちを招き、自分たちのことを知ってもらう、とても貴重な機会なのです。

日頃の礼拝出席者が20人程の教会でも、クリスマスには100人、200人と多くの子どもたちや村人が集まります。野外にテントを張り、クリスマスメッセージ、歌や踊り、ゲームを楽しみます。クライマックスは、会食。皆で丸くなって、ココナツミルクで煮込んだ鶏肉カレーをフランスパンに浸して食べます。年齢を超えたこの人気の大鍋料理は、ちょうど日本のキャンプでのカレーライスのように、汁量を調整すれば多少人数が増えてもおかわりしても大丈夫です。

この一大イベントのために、各教会は一年かけて少しずつ貯金し、そして小さな教会へは近くの教会ネット



農村部での共同クリスマス会

ワークから人、食材、機材や資金を出して助け合います。「一つの教会だけではとてもできない。たくさんの人に来てほしいから、にぎやかに祝いしたいんだよ」日頃から歌や踊りの練習を積んでいる教会の子どもや若者グループは引っ張りだこで、あちこちのクリスマス会で大活躍です。この会は、子どもや若者グループに活躍の場をつくり、教会間の交流と協力関係を深める機会にもなっています。

鮮やかなクリスマスの飾りは手作りです。「皆できれいに作ったからもったいない」と、公現祭後もさらに数か月、もちのいいところでは次のクリスマスまで、礼拝堂や家の教会の壁にそのままに残しておくこともあります。

そのような事情と工夫から生まれた「いつでもクリスマス」。しかし、主イエス・キリストが12月24日と25日に限らず、一年中いつでも私たちのもとに来てくださる、共にいてくださることを仲間と共に喜び祝う。ならば、毎日がクリスマスなのかもしれません。当初私が抱いていた「状況にあわせた臨機応変な対応」という印象は、「何とおおらかで素敵なクリスマスの祝い方！」という感動に変わりました。多くの困難と迫害を乗り越えて生きてきたカンボジアの兄弟姉妹から、クリスマスの意味、信仰の真髄を示されたように思います。

うい・しおり

(協力研究員：元世界教会協議会 (WCC) カンボジア・プログラムコーディネーター、元公益財団法人アジア保健研修所 (AHI) 職員)

学問と政治、宗教と平和

倉田 夏樹

2022年8月15日～18日、韓国の^{ソウル}西江大学校(ソウル特別市麻浦区、イエズス会の運営)で行われたシグニス世界大会(SIGNIS WORLD CONGRESS 2022 Seoul)に参加した。シグニスとは、ラテン語で「しるし」を意味し、映画、テレビ、ラジオ、インターネットなど様々なメディアを使った福音宣教の在り方を探求するローマ教皇庁広報省の下で活動する国際団体(本部ブリュッセル)である。シグニスアジアなど、世界の各地域に下部団体があり、シグニスジャパンなど、各国にシグニスの組織がある。数年に一度世界大会を行ってきており、前回は2017年のケベック大会であった。プロテスタントの読者にとっては、WCC(世界教会協議会)やCCA(アジア・キリスト教協議会)の大会を想起すると理解を助けるかもしれない。WCCやCCAはエキュメニズムに関する組織だが、シグニスはメディア宣教に関する組織である。

ソウル大会(シグニスコリアがホスト)には、シグニ

スジャパンからも、担当司教や信徒らが韓国に渡り参加した。筆者は、Zoomやメタバースでのオンライン参加となった。シグニスコリアのメンバーは、ほとんどがKBS(韓国放送公社)など一般メディアのカトリック社員で、司会進行はプロのアナウンサーが務めるなど、大会でのメディア技術はプロを感じさせるものであった。メタバースとは、インターネット上の3次元の仮想空間のサービスで、日本では古色蒼然な雰囲気のある「キリスト者の集会」で、こうした最新技術が使われることは珍しく、韓国のキリスト教の若さと勢いを感じさせるものだった。



シグニス世界大会の仮想空間メタバースにはシグニスジャパンのブースも登場した

会場には、コロナ禍にも関わらず34か国の代表80人ほどが集まり、元国連事務総長・潘基文の姿もあった。大会テーマは「デジタル世界の平和」で、コロナ禍やロシアのウクライナ侵攻など、混迷極まる現代社会におけるメディアの在り方が、様々な観点から話し合われた。目玉企画としては、2021年にノーベル平和賞を受賞したロシアのジャーナリストであるドミトリー・ムラトフのオンライン参加があり、「真実を伝えながら共感を示すこと、事実をもってプロパガンダとヘイトと戦うことは、ジャーナリストの義務です」と話していた。

大会の日程を終えて筆者は、芦名定道・宇野重規・岡田正則・小沢隆一・加藤陽子・松宮孝明著『学問と政治—学術会議任命拒否問題とは何か』(岩波新書、2021年)と、マックス・ウェーバー著(中山元訳)『職業としての政治/職業としての学問』(日経BP社、2009年)の

二冊を読み直した。翻って、危機の時代における学問の在り方が気になった。

『学問と政治』で芦名定道は、「人文知の役割の一つは、既存の社会秩序のゆがみに切り込んで、その転換を促すことにある。これは、人文知が知識蓄積にとどまらず、研究者としての良心に関わっていることを意味している」（143頁）と書いている。『職業としての学問』でウェーバーは、「わたしなら預言者や民衆政治家（は学校の教壇に立つべきではないからだと答えるでしょう。預言者や民衆政治家には、『街頭に立って、公的に語れ』と求められます。すなわち、批判されうる場所で語れということです」（213～214頁）と述べる。学問が政治に対してとるべき姿勢に関しては、趣の異なる二書である。

学問は決して政治的なことを行う道具ではないが、戦後の日本の人文知があまりにも現実社会と乖離しすぎてきた感もある。学問は必ずしも政治に関わらなくてもいい（勿論、関わる自由もある！）。しかし、平和についてはどうだろうか。学問の自由は平和に担保されている。ウクライナ戦争は、政治ではなく、平和に対する、いのちに対する問いを20年代の同時代人に突き付けている。

それでも、日本国内ではコロナ禍も「外国の戦争」もどこ吹く風で、元の「戦後平和ボケ・メンタリティ」に戻りつつある。しかしながら、ひとたび海外の人びとと繋がることで、実に切迫感のある時代であることが再認識できる。荒れた時代の中で、存在が非力に感じられることが多い人文学であるが、たとえ政治に対して直接的な言明をしなかったとしても、目に見える形、または目に見えない形で、平和を希求する「しるし」をさりげなく示すこともまたアカデミシヤンの、知識人の、そしてマタイ福音書5:9をひかずとも、キリスト者の仕事でないかと思うが、いかがだろうか。

くらた・なつき（協力研究員）



雑録

当研究所の主任を拝命してから1年半が経過した。着任直後の本紙（第85号）雑録でも触れたように、私はこれまで受洗の機会に恵まれていない。祖父はクリスチャンであり、私自身も国際基督教大学で学位取得、のちに明治学院大学に奉職と、キリスト教に縁の深い生活を送りながら、今日に至るまで明確な信仰をもたずきた。信仰者である友人からは、神の存在なしに生きられることが全く分らないと頭を振られたこともあったが、ともかく今日まで幸いにも（？）人生に絶望することなく過ごしてきている。

そうした状況に安住しながら、しかし困惑を覚えることもある。それは他者のために祈りたい気持ちが湧いても、具体的な祈りの対象と様式を持ちあわせないことによる。過去を振り返れば、親疎にかかわらず他者が苦しみ、救いを求める姿に接するたびに、祈りたい気持ちは込み上げ、実際に祈ってもきた。しかしそのような場面で、すぎるべき具体的な神を私はもたない。同様に、十字を切る、手をあわせるといった祈りの様式とも無縁である。それゆえに他者のために祈る際には、不便なことながら、漠然とした何者かを対象に、手を組むだけの根拠のない作法に則り、ただ内心で強く祈るばかりである。

読書するなかでしばしば出会う「信心深い」という言葉が新鮮に響いたことがある。例えば高橋和巳「我が宗教観」には、重い病を患った父に対して、信心深い母が「懸命に神仏の加護にすぎるべき」ことを説いたという一節がある。なるほど、「神仏」という混然とした対象だとしても、きっとこの母は、祈りの対象にも様式にも迷うことがないであろう。自分の日常生活ではほとんど耳にしない「信心深い」という言葉を、信心とも無縁であった私はどこかで羨ましく感じながら、新鮮に受けとめたのであった。

対象も様式も不明瞭ながら、今年も祈りの気持ちが強く湧く一年であった。世界的な感染爆発はなお沈静化せ

ず、終わりの見えない国家間の新たな戦争も始まった。苦しみ、救いを求める無数の他者に対しては無論であるが、ここでは最後に、この一年のごく個人的な祈りについて記して結びとしたい。尊敬すべき出版人である私の親友は、2021年夏にスキルス性胃がんのステージ4であることが発覚し、その事実をブログで公表した。以後、抗がん剤治療を続けながら、極力以前と変わらぬ水準の公私の生活を過ごし、ブログの更新も続け、一緒に温めてきた出版計画も進みつつあった。

しかしやはり癌は何とも手強い。2022年の夏に再入院、そして秋の三度目の入院は長引き、本日（11月29日）やっと退院を迎えた。今後は在宅医療と看護により病状の安定を目指すことになる。快方を願い、本人も周囲もそれぞれに祈ってきたこれまでの月日であった。和らいだ気持ちで過ごし、やりたいことができるよう願う気持ちは、皆これからも変わらない。若く勉誠出版の社長として敏腕を振るい、2018年にひとり出版社として独立したみずき書林の岡田林太郎さん。君の安心と安定のために、今一度、心からの祈りを捧げたい。

たなか・ゆうすけ（主任）

研究所活動（2022年7月～2022年12月）

キリスト教研究所 1日研究会

開催日時：2022年7月16日（土）15:00～17:40

開催場所：92会議室

対面参加とオンライン参加（Zoom）の併用

発表① 黄 イェレム 協力研究員

発表：19世紀史料から見る初期漢訳聖書の頒布事業

コメント：中村 聡氏（二松学舎大学東アジア学術総合研究所客員研究員）

発表② 高井ヘラー 由紀 協力研究員

発表：台湾キリスト教の周縁性と世界性：台南からの視座

コメント：金丸 裕一 協力研究員

2022年度アジアキリスト教講義シリーズ（秋学期）

（各回 18:40-20:10）

第6回 10/4（火）「現代中国の政治とキリスト教」

講師：松谷暉介 協力研究員

第7回 10/18（火）「日本キリスト教の戦争責任告白」

講師：原誠氏（同志社大学名誉教授）

第8回 10/25（火）「生誕100年・三浦綾子

一夫・光世の日記にみる愛と夫婦像」

講師：田中綾氏

（北海学園大学教授、三浦綾子記念館館長）

第9回 11/1（火）「映画とキリスト教」

講師：服部弘一郎（映画批評家）

第10回 11/8（火）「アジア神学の課題としての食」

講師：植木献 所員

中国近現代キリスト教研究プロジェクト研究会

<第1回>

開催日時：2022年7月30日（土）15:30～

※Zoomを用いてオンラインにて開催

<第2回>

発表者：村上 志保 客員研究員

テーマ：「中国プロテスタントをめぐるグローバル化と宗教中国化－「国際勢力」の変化と宗教政策」

開催日時：2022年9月17日（土）14:00～

※Zoomを用いてオンラインにて開催



2022年度 明治学院大学公開講座

「宗教・暴力・戦争(紛争)ー歴史から見る現在」

開催日時：2022年10月8日(土) 10:00~17:15

開催場所：明治学院大学横浜校舎(対面開催)

プログラム

第一部(10:00~12:15)

<発題>

パネリスト5名による各トピックに関する特定の発題

第二部(14:00~16:00)

<パネルディスカッション>

各発題者同士での質疑応答と討議

第三部(16:15~17:15)

<意見交換会>

参加者も含めた意見交換会および質疑応答

パネリスト

- ・島菌 進(東京大学名誉教授/宗教学・日本宗教史)
 - ・塩尻 和子(筑波大学名誉教授/イスラーム研究)
 - ・黒川 知文
(愛知教育大学名誉教授/ロシア宗教史・ユダヤ史)
 - ・Alexander Vesey
(本学国際学部准教授/日本仏教社会史)
 - ・渡辺 祐子
(本学教養教育センター教授/中国近代キリスト教史)
- 司会
- ・久保田 浩(本学国際学部教授/近代ヨーロッパ宗教史)

NPO法人抱樸主催イベント みんなでつくる。希望のまち。

開催日時：2022年11月18日(金) 19:00~21:00

開催方法：明治学院大学 白金校舎 3号館3201教室

(プログラム)

1部 講演 奥田知志氏(NPO法人抱樸理事長)

2部 ゲストスピーチ

※後援：キリスト教研究所

アジア神学研究プロジェクト主催 講演会

「キリスト教信仰共同体とミャンマー軍事クーデター」

開催日時：2022年12月3日(土) 14:00~16:00

開催場所：明治学院大学白金校舎 本館1405教室

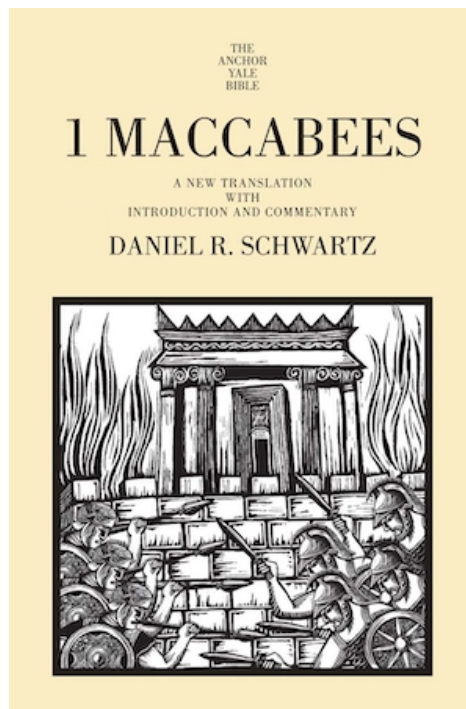
※オンライン(Zoom)併用

講師：渡邊さゆり氏

(マイノリティ宣教センター共同主事、日本バプテスト同盟駒込平和教会牧師)

新着図書

- ・『福音と世界』No. 8、新教出版、2022。
- ・『福音と世界』No. 9、新教出版、2022。
- ・『福音と世界』No. 10、新教出版、2022。
- ・『福音と世界』No. 11、新教出版、2022。
- ・『福音と世界』No. 12、新教出版、2022。
- ・『1. Maccabees』DANIEL R. SCHWARTZ 著、Yale University Press、2022年。
- ・『横浜海岸教会 150年史』横浜海岸教会 150年史編さん委員会編、日本キリスト教会横浜海岸教会、2022年。
(岡部一興先生ご寄贈)



MEMO



あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第89号

2022年12月9日 発行

明治学院大学キリスト教研究所
〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37
TEL:03-5421-5210 / FAX:03-5421-5214
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩